

# 林謙三の東洋音楽研究に関する未発表原稿について

長谷部 剛

## A hitherto unpublished manuscript of Hayashi Kenzo's research on Asiatic music

HASEBE Tsuyoshi

Hayashi Kenzo's unpublished manuscript, "Musical Scores for the Dunhuang *Pipa* and their Relation to Songs," looks at restored musical scores for the Dunhuang *pipa* (a type of Chinese lute from the Dunhuang area) to investigate what kinds of lyrical songs were sung in the actual performance of such music. While the manuscript is both undated and incomplete, significant insights can be gleaned about the process of Hayashi's investigations and the traces of evidence they provide.

キーワード：隋唐 (Sui; Tang)、燕楽 (Ancient Chinese banquet music)、敦煌琵琶譜 (musical scores for the Dunhuang *pipa*)、東アジア音楽研究 (studies of East-Asian music)

東洋音楽研究者、林謙三（1899-1976）は、『正倉院楽器の研究』（風間書院、1964年）・『雅楽—古楽譜の解説』（音楽之友社、1969年）・『東アジア楽器考』（カワイ出版、2013年）などの著書を公刊したが、大量の未発表原稿を遺している。<sup>1)</sup>

そのなかから今回は「敦煌琵琶譜と曲子の関係」をご遺族の許可を得たうえで翻字して公表する。「敦煌琵琶譜と曲子の関係」は、執筆年代未詳、しかも、未完成の原稿である。しかしながら、以下に述べる理由によって本原稿を翻字して公表する意義は極めて高いものと考えられる。

林謙三が1938年に着手した敦煌琵琶譜の解説の成果は、1955年、英語論文“Study on Explication of Ancient Musical Score of *P'ip'a* discovered at *Tun-hunag*, China”（『奈良学芸大学紀要』第5巻1号）として発表され、1957年には中国語版が出版される（『敦煌琵琶譜の解説研究』、潘懷素〔訳〕、上海音楽院出版社）。その後、琵琶の調弦法についての学説の変更を経て、「敦煌琵琶譜の解説」として上記の『雅楽—古楽譜の解説』に収録された。

この「敦煌琵琶譜の解説」では、復元された敦煌琵琶譜が実際にどのような歌詞の歌唱とともに演奏されたかについては論及されていない。唯一、LPレコード「天平、平安時代の音楽—古楽譜の解説による」（コロムビア・レコード、1965年）では、敦煌琵琶譜No.13「又慢曲子 西江月」に同名の敦煌曲子詞（S.2607v）を配しているが、これ一曲に止まる。<sup>2)</sup>

今回紹介する、林謙三「敦煌琵琶譜と曲子の関係」は、この問題について林氏が検討を加え苦闘していたことを示すものである。敦煌石窟より発見された唐五代の長短句歌詞、すなわち敦煌曲子詞は、宋代に一大ジャンルを形成する詞文学の源流として位置づけられるものであり、敦煌曲子詞と楽曲との関係はいまだ解明されていない重要な研究課題である。従って、林謙三「敦煌琵琶譜と曲子の関係」は未完成ではあるが、その検討の過程および痕跡は、われわれに大きな示唆を与えるものと考えられる。

なお、閲読の便に資するため、以下の文中においては、長谷部が書名には『 』を、曲名には「 」を加えるなど加筆を施したほか、適宜【補注】を加えた。

1) 長谷部剛「清楽考—併せて林謙三の隋唐音楽研究に及ぶ—」（関西大学東西学術研究所〔編〕『東西学術研究所創立60周年記念論文集』、2011年）参照。

2) 同文はのち『雅楽—古楽譜の解説』（1969年）に収録された。

## 林謙三「敦煌琵琶譜と曲子の関係」

敦煌琵琶譜の絶対年代は未詳であるけれど、その内容が多数の曲子を含むことや楽曲の構造調性などが盛唐代のものより大分異なる点などに置いて晩唐を遡り得ないものとする。二十曲中、単に「曲子」と題するもの二、「慢曲子」四、「急曲子」三、「慢曲子」と冠称するもの三、以上十二曲の多数に及ぶ。この点より考えて他の曲も盛唐代の楽よりやや変遷した「曲子」と総称するものに包含され、この歌詞は曲子詞であることもまた疑う余地はないのである。本譜の曲名に応ずる詞はわずかに一曲、その他は敦煌石室から出土曲子詞中にも晩唐代詞人の作中にも一つとして適合するものがない。『雲謡集』の「傾杯楽」は一譜字は一間拍をもつを原則としており、本譜の字数と詞の字数との間にたしかに関係があるらしい。と云うのはこの字数を調べてみるに、一段五六十字前後で詞の小令があてはまるほどであるからである。当時は後世ほど詞の歌唱に長短の差がないことが証明されるならば、この譜の字数によって原詞の字数を想像〔すること〕も許されるわけである。左（【補注】以下）に二十五曲の字数を表で表してみる。拍節の工合よりみて明らかに脱落と認められるものは補って計算した。

1	佚名	35+	2	佚名	52+ ,110
3	傾杯楽	123	4	慢曲子	54,48
5	曲子	30×2,44,42	6	急曲子	48,42
7	曲子	48,42	9	慢曲子	64,58
10	慢曲子	121	11	佚名	62
12	傾杯楽	124	13	西江月	48,42
14	慢曲子	24 (× 2),42	15	心事子	48,42
16	伊州	54,48	17	急曲子	24 (× 2),42
18	水鼓子	76,64	19	胡相問	42,138
20	長沙女引	64,104	21	佚名	124
22	撒金砂	70	23	營当	88
24	伊州	54,48	25	水鼓子	72,72,36,96

## No.11 佚名



日暖風 輕佳景, 流鶯似問人, 正是越溪花 捧艷, 独隔千山与  
宿麦畦 中雉雒, 柔桑陌上蚕, 生騎火, 防花月暗, 玉兔長携  
青糸髮 縮臉辺芳, 淡紅衫子 掩酥胸, 出 門斜 撚同 心弄, 意

7



万津, 单于 迷虜塵, 雪落梅庭愁 地, 香檀枉 注歌脣, 欄徑萋萋芳  
彩筆行, 隔牆人笑聲, 莫說弓刀 事, 業依然 詩酒功, 名千載, 待  
惶, 故使橫 波認玉郎, 叵耐不知 何處去, 教 人幾度 掛 羅裳, 待

13



草綠紅臉 可知珠淚 頻魚鱗 豈易呈  
今古事, 万石溪頭長短亭, 小塘風浪平  
歸來須共 語, 情轉傷, 斷却妝樓 伴小娘

23



【補注】上記の楽譜「No.11佚名」に記される三首の歌詞は、

1. 第一曲：『雲謠集』「破陣子（单于迷虜塵）」
2. 第二曲：辛棄疾「破陣子」
3. 第三曲：『雲謠集』「柳青娘（倚闌人）」第一首

である。この曲は林謙三が「No.11佚名」と題する通り、敦煌琵琶譜のなかでも曲名が記されていないものであるが、本原稿で「破陣子」の歌詞が配されていることから、林氏はこの曲を「破陣子」と関係があるものとして見なしていたと推測される。

なお、林氏原稿では、1音が全音符（。）で記されているが、今回は西洋音楽の楽理に従って五線譜上に音符を配置する関係上、1音を四分音符（♪）で記した。また拍子記号

の「c」および第1小節の四分休符（ $\frac{1}{2}$ ）は林氏原稿には記されていない。

上記楽譜では、この曲が16小節から成る曲として記録され、各小節が「|」で区切られている。しかし、東洋音楽（厳密に言えば、林謙三がここで用いている日本雅楽の楽理）において「|」で区切られるのは「拍子」である。この曲は林謙三によって「四拍子 拍子十六」の曲として復元されており、林氏原稿には「|」の前、四拍目の音符の上に、太鼓拍子をあらわす「●」が置かれている。（以上【補注】）

唐代の歌詞が必ずしも全曲を通じて唱うように配されているのではないことを傍証する一挿話がある。『杜陽雜編』（蘇鶚）に穆宗・敬宗の頃の飛龍衛士、倭国人韓志和が虎子を懐らし、舞を教えたことが上聞に達し召し出された時のこととして、

志和遂於懷中出一桐木合子、方數寸、中有物、名「蠅虎子」。數不啻一二百焉。其形皆赤。云「以丹砂啗之故也」。乃分為五隊令舞「涼州」。上令召樂以舉其曲、而虎子盤迴宛轉、無不中節、每遇致詞處。則隱隱如蠅聲。及曲終、纍纍而退、若有尊卑等級。<sup>3)</sup>

と記している。「涼州」は開元中の作で、『樂府詩集』（七十九）に第一第二疊は七言四、第二疊は五言四、排辺第一・二疊は七言四とあるが、「李暮吹笛記」（楊巨源）によれば、「十三疊、誤って水調に入る」の他、入破とあることになっている。開元代（以下、中欠）<sup>4)</sup>

（ ）「三台」・「傾杯樂」の歌詞の体。この二曲は初唐代に已に存したもので、許敬宗の「上恩光曲歌詞啓」に、

竊尋、樂府雅歌多皆不用六字。近代有「三臺」「傾盃樂」等艷曲之例、始用六言。

として、共に六言の詞を用いたことを教える。韋応物の「三台詞」も六言八句あり、王建の「宮中三台」「江南三台」は共に六言四句で、特殊の体をなしていたことを知るのである。「傾杯樂」については、（【補注】以下の文章を欠く）

3) 【補注】 林氏原稿には返り点が施されているが、今回は削除した。

4) 【補注】 林氏自身「(以下、中欠)」と記し、以下の文章を欠いている。

( ) 桂花曲。「樂府詩集」(八十)に、白居易、蘇州において作るどころと云う。「長慶集」(三十四)に、

「醉後聽唱桂華曲」(【補注】白居易自注) 詩云「遙知天上桂華孤、試問嫦娥更要無。月宮幸有閒田地、何不中央種兩株。」此曲韻怨切、聽輒感人、故云爾。

桂華詞意苦丁寧、唱到嫦娥醉便醒。此是人間腸斷曲、莫教不得意人聽。

とあり、本詞は七言絶句であるが、集(三十五)に、

「聽都子歌」(【補注】白居易自注) 詞云試問嫦娥更要無。

都子新歌有性靈、一聲格轉已堪聽。更聽唱到嫦娥字、猶有樊家舊典刑。

とある「聽都子歌」と同じである。(【補注】以下の文章を欠く)

【追記】 本研究は、平成26年度関西大学教育研究緊急支援経費(研究促進費)を受けた成果である。